

大腸の腹腔鏡手術

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 103 》

患者の体への負担が少ない手術法として近年、注目を集めている腹腔鏡手術。開腹手術に比べ、傷が小さく回復が早い一方で、施設間の技術レベルの差が大きいことから、山梨県内では実施率が低いのが実情だ。県内唯一のがん診療連携拠点病院である県立中央病院は技術の向上に伴い、今年から腹腔鏡手術を行う大腸がんの適応を拡大。進行がんに対しても積極的に実施していく考えだ。

大腸外科の安留道也医師によると、大腸がんの手術は①



大腸外科
安留 道也医師

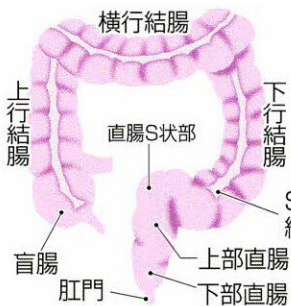
進行がんに適応を拡大

大腸を周囲の組織から剝離する②血管を処理してリンパ節を郭清する③病変部を切除して大腸をつなぎ直す④の過程に大きく分けられる。腹腔鏡手術ではいずれも開腹手術と同等に行えるだけでなく、解像度の高いカメラや止血能力の高い電気メスなどの普及によって、より精度の高い手術が可能になっているという。

県立中央病院では2012

年から腹腔鏡下大腸切除術を開始。大腸がん治療ガイドラインに沿った治療方針で、基本的には早期がんに限って実

大腸の構造



施してきた。このため同年8件、13年24件、14年20件、15年15件と、同病院が実施する大腸がん手術全体の1割台にとどまっていた。

ガイドラインの改定や技術の向上に伴い、今年からは進行度にかかわらず盲腸から直腸S状部がんのほぼすべての症例に適応を拡大。手術の難度が高い上部・下部直腸がんは早期の症例に限るものの、腹腔鏡手術症例が増加し、4月までに15件に上っている。直腸がんについても適応を拡大していく予定だ。

ただ合併症や患者の状態、腫瘍の大きさによっては開腹手術が望ましい例もあり、安全性を考慮しながら、よりよい手術を提供していきたい」と安留医師。さらに、モニター上で臓器が立体的に見える最新機器の導入も視野に「外科医がチームとして技術を向上させていきたい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します